

青嶺 Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

青嶺中は「ひとつ」

第二四回卒業証書授与式を終えて

卒業生三十三名が巣立っていった卒業式から、数日が経ちました。

青嶺中学校に関わる全ての人たちが、卒業生たちのために精一杯の気持ちで取り組み、細やかに準備され、その思いを受け止めた卒業生たちが、精一杯の気持ちと歌と態度で返してくれた、まさにすべてが一体となった厳粛でいて、あたたかな思いに溢れた式でした。

松園さんの答辞には卒業生の成長の足跡が語られていました。最初大人しかった自分たちが、劇で表現することで変わったということでした。変化と成長を自覚し、そのきっかけとなった「表現すること」に出会えた感謝を感じました。だから最後に「表現することを通してみんなが思いを伝えることにこだわったのですね。」

在校生の先輩を気持ちよく送り出してあげたいという思いも、送辞や歌に込められていました。

三年生の式歌では会場から自然と拍手が起りました。これまで多くの式に参加しましたが初めての式です。それほど思いのこもった、素晴らしい歌でした。

この式で私は「学校の原点」を見ました。人の思いを集めればこんなに素晴らしい。一生心に残る時間が共有できる。相手のことを思いやり、自分ができることを一生懸命にやる姿は本当に美しい。青嶺中学校がまさに一つになった卒業式でした。

少し長いのですが、式辞のなかで紹介したりチャドバックの言葉を、次に載せます。

「人間は大体、目に見えるものしか信じないでしょう？たとえは、汽車の2本のレールは地平線のとこで絶対にくっついて見える。そういうふうに見えるからそう信じているけど、そうじゃないんだね。飛行機で線路の上を飛ぶと、2本のレールは、行けども行けども平行なわけだ。また、雨が降って、地上では傘をさしている。人々は頭上に太陽があることを忘れてるわけだ。だけど、ひとつたび飛行機で雲の上に乗ってしまえば、そこに太陽は、あるわけなんだよ。」

「人間が本当に愛するものを見つけてるのはとても大変なこと、それがすべて、要するに人生の中心だと思っただけ。一生かかっても、ついにそれが見つかからない人も多いと思うんだよ。だけど、ドアが閉まっても、いつかは絶対に自分の好きなものが見つけられると、そういうふうな導かれてるんだと信じてることだね。だいたい、どこもかしこも閉まっていると、絶望的になっちゃうんだよ。だけど、あっちこっち叩いているうちに、どこかのドアがポンと開くと思うんだね。その開いたドアが、自分のいちばん求めている、愛するものへの道だと、とりあえず信じてみるんだよ。そこへ入る、またドアが全部閉まっている。必死になって叩くと、またひとつだけドアが開く。そういうところをひとつずつ通過して、いつか、いつか、ものすごい光が自分の中に出てくるはずなんだよ。」

これは卒業生ばかりではなく在校生の皆さんに向けてのメッセージでもあります。

・目の前のことだけに囚われて簡単に絶望しないようにしましょう。
・雲の上には変わらぬ太陽があることを忘れず、希望を持ち続けよう。

・自分がいちばん求めているものに出会い、手にするまでドアをたたき続けよう。

これから先の輝ける未来に向けて、全員で新しい青嶺中学校を創っていきましょう。

親友のことば

陸上競技部のキャプテンだった大学時代、大所帯の卓球部のキャプテンを務めていた親友とは卒業してからも仲良くしています。そして人生の別れ道では相談し、後押しをしてくれたことも多くありました。

東京で仕事をしていた時、彼は茨城にいてしばしば会っていました。一足早く結婚し、父親になった私は四国の香川県に転勤することになりました。彼は四国にも足を運んでくれました。

自分の子どもと接するうちに、教師になりたい気持ちが以前にもましてどんどん強くなっていました。どうして

も自信はもてずに、不安や迷いの方が大きかった私に彼は言いました。

「今、そうしたいって思っているならそれがいちばん大事だろう。条件が完璧にそろい、自信がもてるなんてことはない。完璧じゃないのだから、わからないことは生徒から学べ、生徒に教えてもらえばいいんだ」

そのことばで吹っ切れた私は、三か月後に辞表を提出し会社員を辞め、同じ四国の高知県に引っ越しをし、教師になるべく勉強を始めました。

実は、以前書いた「なくしたお守り」の捉え方も、同じ彼の考え方です。お互いに似ているところ、違うところがありますが、心から信頼している一生付き合っていく親友です。そんな人間と出会えた私は本当に幸せです。

これから皆さんを多くの出会いが待っています。そこにはかけがえない出会いもあるでしょう。本当に楽しみますね。

校長室より

日が差す時間がどんどん長くなってきました。朝、子どもたちを出迎えています。朝、子どもたちの時間や位置が変わってきており、膨らむつぼみを見ながら、春の到来を実感します。もうすぐこの地に来てから一年です。